

ほな歴史通信

第 7 号

1998. 6. 1

歴史中文学習と郷土史

NHK大河ドラマ「將軍徳川慶喜」の放映により、町民の間に日本の歴史と関連した郷土の歴史への関心が高まってきている。その背景として、江戸時代の大子地方は水戸藩領であった関係から、水戸藩主徳川光圀が十一回も訪れていること、徳川慶喜の父斉昭が一回訪れていること、桜田門外の変の首謀者関鉄之介の潜伏の地であったこと、武田耕雲斎を首謀者とする天狗党集結の地であったことなどへの関心があげられよう。

このように日本の出来事（事象）を理解するうえで、郷土の歴史的な出来事への関心は、日本の歴史を身近なものにしてくれるのである。

歴史を児童・生徒に興味深く、親しみやすく、自分とのかかわりの深いものとして学習させていくために、また、日本の歴史的事象を身近なものとして探らせるためにも、郷土の歴史を歴史学習の中に取り入れていきたいものである。

歴史学習の中に郷土の歴史を適宜に取り入れることによって私たちの郷土がわが国の発展のうえに、どのような役割を各時代において果たしたか、また、郷土がその頃の日本の中で、ど

のような位置を占めていたかが明確になってくるであろう。郷土の動きは、すべてが直接的でないにしても、間接的にわが国の歴史の発展に寄与したり、あるいは何らかの形で、わが国の歴史の礎石となっているのである。

郷土の歴史を地域教材として、歴史の学習に活用するねらいは、一つは、日本の国の歴史や文化の展開を、身近で具体的なものとして実感させることによって、自ら学ぶ学習意欲を高めていくこと。二つは、郷土の史跡や文化財を児童・生徒自身に見学・調査させることによって、歴史を身近なものとして受けとめさせ、郷土愛を育てていくことである。

郷土には歴史学習の教材となる遺物・遺跡など種々のものがある。また、近年は、各市町村で歴史的な研究方法によって調査した遺跡や古文書、古い文献、伝承等が収集され、それらをもとに執筆された史料集、写真集、通史が出版されている。それらの資料を教材として活用するには、教師は児童・生徒の実態に応じて十分に吟味して利用しないと、児童・生徒にとっては抵抗があり、実態にはそわない。したがって、これらの資料を教材として活用するにあたっては、学習する単元内容との関連をふまえ、児童・生徒が歴史的事象を具体的な事象として理解できるように、歴史的な資料を適宜に取捨選択したり、平易な文章に直したりして与えることが肝要である。

教師は日々多忙であり、時間的な制約もあって各種の資料を直接歩くことによって収集することには困難が多い。しかし、郷土の歴史をよりよく活用するためには、常日頃から郷土に関する出版物、各種統計類の刊行物、古書、地図、古文書、写真等の資料の収集に努め、適切な教材や資料をできるだけ身近に整えておき、必要なときにはいつでも利用できるようにしておきたいものである。

（小澤）

大子町の石仏あれこれ

大子郷土史の会が、町内の石仏・石塔の調査を始めて満十年になります。地元の方々に教えて戴いたり、お忙しい中をわざわざ案内していただいたりして調査した結果を、教育委員会ですべて戴くことができ、感謝しております。

この機会に、大子町の石仏をいくつかご紹介してみたいと思います。先ず、最も貴重なものとして、中世の板碑が挙げられます。これは、秩父産の緑泥片岩を板のように薄くして造るもので、県北では極めて珍しいものです。下野宮にありますが、このようなものが有るということは、大子町の誇りと言えるでしょう。是非、町の文化財に指定して、長く保存して戴きたいと願っています。



次に、お地藏様について少し述べてみたいと思います。お地藏様といえば何処にでもあって珍しくもないと思われるでしょうが大子町のお地藏様で、建立年月日や造立の趣旨などが刻まれているものは少ないのです。その中で、浅川には元禄時代の年月を刻んだものが二基もあります。元禄時代の石仏・石塔は、大子町では古い方で、数も少ないのですが、それがあまり離れていない所に二基もある上、その内の一つには、これも県北には見られない日記念仏という銘文があるのです。日記念仏については、まだ研究している人も少なく、分からないことが多いので、もし何か心当たりのある方がありましたら、是非お知らせ戴きたいと思えます。元禄より少し後の、享保と元文のものが中郷と北吉沢にあります。中郷のものは立派なお堂にお祀りされており、女人念仏供養と刻まれています。北吉沢のは坐像ですが、大きくて見事な像です。

調査をしていて面白いと思ったのは、北向き地藏と呼ばれているものが方々にあったことです。北を向いているのは普通と、違っているという意識があつてそう呼ばれているのでしょうか、何ヶ所もあると「エ、これも？」なんて思っています。

その外に残っているものとしては、左實の四十八夜念仏塔これには、女の人の名と思われる平仮名が一面に書かれているのです。天和三年（一六八三）の建立で、元禄より古く、その時代の女の人が、何を願ひ、どういう思いで建てたのでしょうか。

馬頭観音塔も非常に数の多いものですが、中にはとても面白い字のものがあつます。馬という字が本当の馬のような形をしていたり、古代の象形文字のように見えるものがあつたりして、当時の人の遊び心に触れるような気がします。

まだまだご紹介したいものは沢山ありますが、紙面が尽きましたので、終わりにしましょう。

明治天皇の茶碗 (一一)

桜岡滋弥

曾祖父桜岡八郎は、なぜ山口正定なる人物に、いわば「箱書」に一文がなければ何やらわからない茶碗や皿をかしこまって賜わったのだろうか。

山口正定は水戸藩士山口頼母正和の孫で、その山口家は代々頼母を名乗り、大番組二百石という家格であった。正和の長男は正直といい、この正直が水戸藩北郡奉行所下の一つ小菅陣屋に一時籍をおいていたことがある。正直の兄弟が山口徳正、その息子が桜田門外の変の浪士の一人辰之介である。

正直も父の名を襲名、山口頼母正直と称している。妻は、吉成又衛門信貞の娘貞である。

頼母正直が小菅陣屋に配属になったとき、支配下の村の一つ外大野村出身の飯村平介を臣下に加えた。その飯村は、のちの桜岡源次衛門真方、八郎の父である。頼母正直は、支配する村落や周辺一帯が菟蓐栽培に最適であることを知っており、諸沢村では中島藤右衛門が菟蓐栽培農家として著名であった。正直には藩の殖産事業に一役買おうとの気持ちがあり、菟蓐の販売権を水戸藩が持つてはどうかとの意見を出すに至る。しかし実際は、菟蓐販売については水戸藩専売までには至らなかった。かろうじて、会所を設けて販売高から上前をはねるという仕組みになった。

その会所は当初前出の中島家におかれたが、頼母正直は、臣下であり桜岡家を継いだ源次衛門真方に会所をまかせようと、中島家から桜岡家に会所の運営権を変更させた。

頼母正直の長男が、件の茶碗と皿の贈り主徳之進正定である。天保十四年の生れの正定は父が赴任していた小菅陣屋には無関

係で、代々の大番組職を継いだ。頼母正直の代で本来なら桜岡家との付き合いはなくなるはずであるが、徳之進は桜岡家をスポンサーとして明治期に至るも交流している。数多く残されている徳之進からの書状のほとんどは、金を用立ててもらったことへの礼状である。

彼は、水戸藩の積極的な憂国の志士ではない。例えば、文久元年に宇都宮藩の児島強介らが水戸を訪れ、老中安藤信正の要撃を相談しているが、彼は参加せず、同志平山兵介繁義が坂下門外で老中を襲い、闕死した。

十四代将軍徳川家茂が上洛した際、水戸藩では將軍護衛を名目に武士団を随従させたが、このとき山口正定はかつて父の赴任先であった北郡奉行所管内の郷士、神官らを兵として募り、自らその長となつて家茂に同行、上洛している。將軍護衛の武士団の最高責任者は藩主徳川慶篤で、一度は三卿の一つ清水家を継いだ弟の昭武も家臣を連れて加わっていた。のちに、一橋家を継いだ慶喜が十五代將軍に任命されたとき、折しもフランスの皇帝ナポレオン三世の提唱で万国博が開催されることとなり慶喜が招待されたが国事多難の折から出席できず、昭武にその代行が命じられ、昭武が渡仏している。

ところで、將軍家茂の死去に伴い、京都に滞在していた水戸藩士たちは、護衛の任務が終了して京都を後にする者と、新たに將軍職に就いた慶喜が一橋家の出で武士団を持たないため引き続き京都に滞在して新將軍の護衛に当たろうとする者とに分かれた。正定は、滞在する側にまわった。

国許では、藩内の一勢力である諸生党によつて政治が行なわれ、天狗党と称された人々は政治から遠ざけられる事態となつていた。

企画展を見て

吉村昭氏の歴史小説『桜田門外ノ変』には関鉄之介の天子潜伏時代のことが書かれているが、今回の企画展に義公、烈公関係の遺品ばかりでなく鉄之介関係等の数々の遺品が展示されていて、その昔が偲ばれ一入感無量なものがあつた。

今回の企画展は勿論、ドラマ徳川慶喜にちなんで、天子にまつわる徳川家の遺品を陳列するのがねらいであつたろうが、これ程たくさん貴重な資料があるうとは予想しなかつた。かけがえのない資料の提供者にお礼を言いたい。それらは日本の歴史の変革に大きくかかわつた水戸徳川家を、そして天子とのかかわりを如実に物語っているのである。単なる封建時代の遺物として葬り去ってはならない。普段はなかなか見られないお宝をいとも簡単に見られたとは誠に感激である。

それにしても展示会場には驚いた。展示方法が本格的なのであつた。こうした展覧会を企画した町の英断と関係者の努力に敬意を表したい。

天子には義公、烈公関係以外にも、各種の分野で価値のある資料がまだまだたくさん眠っているのではないかと思われる。そこでぜひ資料館がほしいのである。先日、町長さん助役さんと面談する機会があつた。その時に、町長さんは、「天子にもそんな計画があるんですよ」と言われたのでたいへん心強く思つた。

観光天子はさることながら、歴史ある天子、文化人の住む町天子を一日も早く実現したいものである。本企画展誠に時宜を得て見事に成功したと思われるが、惜しむらくは参観者が、特に若い人の参観がいまいちだったということであらう。

(二方 和夫)

【編集後記】

梅雨に入ると例年、梅もぎりをするのですが、今年はどうしたとか実がほとんど成っておらず、少々残念がっています。春にはたくさん花が咲いて小さな実をいっぱい結んだのですが、それでも、ひとつふたつ、ところどころに実を見つけてもぎ取り、食べてみました。生梅の歯が浮き上がるようなその強烈な感触は、子供の頃によく食べた記憶を呼び起こしてくれました。

「ほない歴史通信」第七号をお届けします。本号の巻頭には、小澤教育長さんから一文をいただきました。小澤さんは郷土史に造詣が深く、町史の編集事業にも長くかかわっておられました。かつて教員時代には中学校の郷土研究クラブの顧問として生徒を指導し、数々の成果を上げられています。子供達の歴史学習に郷土の歴史や文化をどう生かすか、郷土愛を育む課題は多いようです。

桜岡さんの「明治天皇の茶碗」は前号に続くものですが、好評を博しており、この先が楽しみです。このほか、今回は天子郷土史の会のお二人の方に寄稿いただきました。菅井さんの「天子の石仏あれこれ」は、このたび町によって刊行されました『天子の石仏』。石仏・石塔調査報告書の編集者の立場から書いていただいたものです。また、二方さんには、先に町により開催された企画展「水戸藩主・光圀と斉昭の巡村」の展示を見ての感想をお寄せいただきました。文化立町実現に向けて、今何をなすべきか。皆様のご意見をお聞かせいただければと思っています。

(井上)

編集人

斎藤典生(茨城大学文学部)

野内正美(茨城県立歴史館)

石井喜志夫(元教員)

小澤 圀彦(天子町教育長)

井上 和司(天子町社会教育課)

編集発行

遊史の会

天子町立中央公民館歴史資料室 気付久慈郡天子町大字池田二六六九番地

☎ 三九一五五

☎ 〇三九七二六七